1
すべての成る（生成消滅する）ものと有るものとは

あるいは(1)原因によって（すべての）成るものは成り、有るものは有るのか

それとも(2)両者とも原因を書いているのか

それとも(3)両者それぞれにおいて、一部のものは原因をつくり、他のものは原因をつくのか

それとも(4)成るものはすべて原因をもつか、

それとも反対に(5)有るものはすべて原因をもつか、

有るものは(a)一部のものが原因をもち、他のものは原因を欠くのか

あるいは(b)有るものはすべて原因をもたないのか

成るものは(a)一部のものがそうで、他のものは先のようである(原因をもたない)のか

あるいは(b)成るものはすべて原因をもたないのか、いずれかである

さて、まず永遠のもの（有るもの）については、一方、（そのうちの）第一位のものたちをは他の原因に帰することは、それらが第一位のものであるゆえ上、不可能だが、

他方、第一位のものたちに依存するものは、前者から「エイナイ（本質）」をもっているのだとしよう

なおまた、それぞれのもののエネルギエア（働き）を規定するためには、人はそれらの原因をウーシア（有）に帰するのだとしよう

次に、生成するものと、常に有るけれども同じ働きを常にしているのではないものとについては、これらはすべて原因によって生じるのだと言うべきであろう、無原因なものの方を承認するべきではない。

（たとえば）あの虚妄の（原子の無原因の）偏動とやらにも、物体の突然の、いかなる原因も先行することなしに成立した運動ともやらにも、また魂を動かして、以前にしていなかった何かを行うように仕向ける何かももないに起きる、魂の気遣ずれな（無動機の）衝動ともやらにも、存在の余地を残すべきではない

エピクロスの偏動（パレンクリシス）

エピクロスによれば、魂を構成する原子が無原因に偏動することにより、魂は自由に意志しうる

というのも、魂を動かしたのは、意志されたものか――これは（魂の）外から内にあるもの――欲求されたものであるし

さて、すべての（出来事）は原因によって生じるとして、それぞれの直接の原因を見いだして、これらに（出来事の原因）を帰するのは、たやすいことである

また、あるものの（出来事）は技術に帰せられるべきであるし、健康になったことの原因は、医術と医者である。また富裕になった原因は、宝物の発見とか、ガルバからの贈与とか、労苦や技術によって金をもうけたことである

また、子供の原因は父親であり、さらに外部から子供作りに寄与する何らかの補助的なものがあれば、それも（原因である）

そうでないとて、まさにこのことによって、（動機よりも）もっと大きな一種の必然性が、魂を来襲するだろう、つまり、魂が自己自身に属さない（自主性がない）で、自分の意志によらない、無限因のそのような（気まぐれな）運動をすることになるだろう

そうでなくて、どのような意欲対象も（魂を）動かさなかったのであれば、魂は全然どのようにも動かなかったことであろう（アリストテレス『運動について』III 10,433a, 27-28）

たとえば、（だれそれが）アゴラ（市場）へ出かける原因は、ある人に会のねばならぬとか、貸金を取り立てねばならぬと考えたことである、また一般に、（各人が）これ、あるいはあれを選択することの、そしてこれに向かって（行動に）踏み切ることの（直接の）原因は、こうするのがよいと各人に思えたということである

これは、それぞれがちがった所からやって来る、たとえば、しかしかの食物とか、少し遠いものとしては、子供作りに好都合なように浄らかに流れる子種とか、出産に適した土地とか、そして一般に、自然に（子供の生まれた原因を帰すべきである）

2
さてしかし、これらの原因にまで来て停止し、そこから上へ進むことを欲しないのは、多分いい加減な人間の、つまり第一位の、そして（始源・根源）の原因に関して登りつめて行く人たちの（とは）に耳を傾けない人間のすることである

というのは、同じ出来事が起き時に、たとえば月が輝く時に、なぜある者は狼狽し、別の者はそうしなかったのか、また人、病と性格と運びさまざまなるこという事実も、（原因を）遠方に求めるべきことを要求する

そういうわけで、彼ら（哲学者たち）は立ち止まることは決してなく、ある人たちは、とどまって原子のような物体的な始源を立て、これらの運動と衝突と相互の結びつきによって、それぞれのものを作り上げる

そして、それぞれのものは、あのものたち（始源・原子）が結合し、働きかけ、働きかけられるその仕方に応じて、生じたり、ある状態になったりするのだと考え、さらにわれわれの発動（意思決定）や性向すらも、あの始源たちが作り出すままに存在するのだとして、これらに基づいて、これら原子からの必然性（強制）を、存在するものの内へ引き入れるのである

また、誰が別の物体を始源として認めて、これらから一切のものを生じめるはあるにも、その人は、やはりこれらから来る必然性に存在意すそものを自己の意志の中に引き入れることになる

また別の人たち（ストア派）は、世界の運行を（始源たち考えるる）。この運行は、一切のものを包んでいて（諸天球の）運動と、惑星およびその位置の位置と、それらが合同で形作る図形に応じて、一切のもの（出来事）を作り出すのだそうだが、これらに基づく予言を証拠として、彼らは、一切のものがこれからも生じるのだと考えるのである

また別の人たち（占星術の信奉者たち）は、世界の運行を（始源たち考える）。この運行は、一切のものを包んでいて（諸天球の）運動と、惑星およびその位置の位置と、それらが合同で形作る図形に応じて、一切のもの（出来事）を作り出すのだそうだが、これらに基づく予言を証拠として、彼らは、一切のものがこれからも生じるのだと考えるのである

さらにまた、原因（と結果）の相互の繋ぎ成し、上から（下への）連なり、そして後のものは先のものによって生じるのであり、先のものなくしては生じえないのだから、後のものは先のものに常にしたがっており、それへ依存するのだ、そして後のものは、自分より前のものたちに隷従するのだ――以上のことをある人が主張するならば、その人が別の仕方でやはり運命を引き入れていることは明らかである

3
さて、原子であろうと、いわゆる元素であろうと、とにかく物体に一切を委ねて、そしてこれらから生じる無秩序な運動によって、スタンク（秩序）とロゴス（理法）と（世界を）支配する魂を生み出すことは、どうやらのおいにも不条理で不可能なことであるが、原子からそうすることの方が、より不可能である

そして、この説についてはまだ、正統な言説が、すでに述べられている、さてしかし、だれかがこのような始源を立てたとしても、そこからの始原は、やはり無性も、その他の意味での何らかの<運命>も必ずしもこれ（始源）に伴いはしないのである

そして、なるほど一方、肉体は、原子に打たれたあといに、それらの原子がもたらす変容を必然的に受けなければならないだろうが、他方、魂の（能動的な）行事と（受動的な）変容を、原子のどのような運動に入れ帰するのだろうか

というのもあるる一つの原子が）下方に運動し、あるいはどこへなりと変容するばあいに、（それによって起きるという）どのような打撃に、人は、魂がしかしかの内容の推論なり、しかしかの発動（意思決定）に入る、あるいは一般的に何らかの推論なり発動なり必然的な（魂の）動きなりに、あるいは一般にそのような動きに入ることの（原因）を帰することができようか

次に、この同じことを（原子とは）別の物体を方物の原因として立てる人びとに対しても、さらに進た、なるほどこれら の物体は、われわれを規定のだり、冷やしたり、それどころかこれらの（われわれの）比較的弱体な部分を滅ぼすこともできるけれども、魂が行うに作事のどのようなものもこれら の物体からは生じえないだろう、これらの仕事は別の始源から出て来るにちがいない、と

4
しかし、それでは果たして或る一つの魂（世界霊魂）が全世界を貫通しつつ、一つを成就するのだろうか、その際もそれぞれの魂は、（世界全体の）一部分として、全体が導くままに動くのである

しかし、第一にこの設の主張する）必然性とは、（諸原因）の順次のつながりと編み合わせ（結合）をペイマルメネー（運命）と（諸因の連鎖）であるというのはまないのだろうか

しかし、第一にこの設の主張する）必然性とは、（諸原因）の順次のつながりと編み合わせ（結合）をペイマルメネー（運命）と（諸因の連鎖）であるというのはまないのだろうか

同様に、世界のばあいにも、仮にもし（論者の言うごとく世界霊が）だだ一つのものとして働きかけたり働きを受けたりしているのだとすれば、（つまり或るものの他ものから生じるというように、いつでも別のものの（より先のもの）へ帰せられる原因によって働きかけ合っているのではないとすれば、すべてのものの原因によってもしるということは真実でなく、むしろすべてのものが一つのものであるだろう

いやしかし、それぞれの者はやはりそれぞれの者ではないとすれば、われわれの行為や思考はいったいどうなるのだろうか、さらに各人の（通常的に）美しい行為と賢い行為は、各人自身から発するのではなく、ゼウスとか、ほかの人びとから発するのだとすれば、自分の本の美の中に美わすべきではない

5
しかし、もしかしたら、それぞれのもの（出来事）が成就されるのは、そのような仕方ではなくて、ちょうど（宇宙の）運行と星々の運動が一切のものを管理しながら、それぞれのものを星々の相互の一視相と上昇と入没と会合における一位置関係によって、配列するのだろうか

視相：アスペクト
上昇：星が東方地平線にあること
入没：星が西方地平線にあること

なぜなら、ひとは（占星術）は、とりわけこれらに基づいてあって、将来世界の内で起きるであろう出来事についても、また各人の身の上に何が起きるだろうか、いやそれどころか、各人が何をあえるだろうかということまで予言するのだから

さて以上に対して、第一に、こう言えなければならない、すなわち、この論もまた、ちがった仕方でではあるが、われわれのものを――われわれの意志や思考や意欲や選択を、ものごとを（天体）に属するものとしてはいわれは何もゆえずに、ころころと転ばされているところこうずなないようにとだけ言われるのだろうか、われわれは自分自身から、自分の本性に基いてあるものとしてはいわれは何もゆえずに、ものごとを（天体）に属するものとしてはいわれは何もゆえずに、ころころと転ばされているところこうずなないようにとだけ言われるのだろうか、われわれは自分自身から、自分の本性に基いてあるものとしてはいわれは何もゆえずに、ものごとを（天体）に属するものとしてはいわれは何もゆえずに、ころころと転ばされているところこうずなないようにとだけ言われるのだろうか

しかし、われわれのものは、われわれに与えられるならば、もっとも、われわれのものの――すなわち、われわれが必然性からこうむるものは何であるかを区別すべきであって、――切合切のものをかのものたちに帰すべきでない

だから、人はわれわれ自身が行う仕事は何であり、われわれが必然性からこうむるものは何であるかを区別すべきであって、――切合切のものをかのものたちに帰すべきでない

しかし、われわれのものは、われわれに与えられるならば、もっとも、われわれのものの――すなわち、われわれが必然性からこうむるものは何であるかを区別すべきであって、――切合切のものをかのものたちに帰すべきでない

しかしもし、われわれが現前に見ているように、他の動物も魂であり、これら（星々）のシュンパテイア（共感）によって成長も衰えもするのであるし、また他の部分動物にこれらから受けるのだと、さらにまた地上の諸地域の差異も、全宇宙とのとりわけ大国との位置関係によるものである

そしてまた、他の植物とも動物にがいてなく、人間の姿形と大きさと知の性と気質とに関係とは変いてはなく、それぞれの性格までも、地域にしたがって変遷するのだとしたら、全宇宙の変化とか、物の変起者である

なぜなら、ひとは（占星術）は、とりわけこれらに基づいてあって、将来世界の内で起きるであろう出来事について、また各人の身の上に何が起きるだろうか、いやそれどころか、各人が何をえるだろうかということまで予言するのだから

星々はそれらを単におびするだけではなく、引き起こしもするのである、では、生まれの良況について、「星は父方母方をともに数えるとすると、星々の位置関係がすでに決定されているのだ」、どうしてこの事実は（星々によって）引き起こされたと言えるだろうか

この事実は、彼らが予言の拠り所とした星々の位置関係が生じる以前から、両親の身の上にすでに存在していたのだから

とすると、どうして各人の星々の位置関係がすでに決定されていたのだろうか

それにまた、容姿が親に似ているという事実が、実したも賜さも、星々の運行からではなくて、素系から来ることを告げている

しかもまた、いったいどうしてそれらは、ずっとずっとそれらの星々が（同一の）図形（位置関係）によって同時に人間たちをも、他の諸々の生きものたちをも作り出せるのだろうか

しかもまた人びとは、子供の誕生から両親の出会う瞬不審を、また父親の祝それから、まだ生まれていない子供のことを、なんの気性で、どんな運不運にめぐり会うかを予言するのだし、また兄弟の一方のそれから他方の兄を、また妻のそれから夫の上に起きることを、逆にまた妻から前者を予言するのである

しかしまた、いったいどうしてそれらは、ずっとずっとそれらの星々が（同一の）図形（位置関係）によって同時に人間たちをも、他の諸々の生きものたちをも作り出せるのだろうか

6
いや実際には、それぞれのものは、自己の自然にしたがって生まれるのである。つまり、ちょうゆえに馬として、人からゆえに人として、また、それぞれの性質の人からこれれの性質の人として

もっとも、世界の運行を――大部分のことは人間に任せるけれども――（親に）協力して働いているのだと認めよう、また、肉体に対しては、肉体的な仕方で、多くのことを――熱や冷たさや、これから生じる肉体の混合状態（体質）を――寄与するのだとしよう

それに、性格の素質さが、神であるも（天体）から、どうして与えられうるだろうか

けれども、性格や営みや、とりわけ肉体の混合状態に隷属しないことがな――たとえばそれが、文法学または幾何学者とか、さいころ振りとか、これらの方面であるある発見者とかになるかということ――に対しては、どうして（星々が原因であればえようか）

全般に、星々が――次むるので、つまり地球の下方へ運ばれるので、そのために悪いめに会うて――与えるとされる限りの諸悪についてはどうか、まるで星々が、われわれとの相対的関係において、「次む」ばあいに、何か特別なめに会っているのようであり、常に天球に付属して運ばれている（のではなく、地球に対して常に同じ位置関係を保っているのでもないのようである

また、神々（星々）のある者が他の者をその折々に異なる位置で眺めることによって、より近者なものとなったり、より遠れた者となって、その結果、彼らが良いめに会っている時には、われわれに良いことをし、反対の時には悪いことをするのだ、とこのように言うべきでもない

否、もしろ、われわれは次のように言うべきだろう、これら（天体）は、宇宙全体の保全のために運行しているのだが、なお副次的な効用をも提供してくれているのである

つまり、まるで文字を眺めるのみ」ように、これらを眺めて、この種の<文法>に通じた人たちが、そこに意味されていることを類比的に考量することによって、図形から、未来の出来事を読み取るという効用である。たとえば鳥が鳴く鳴ばから、これは何か高潮な行為を示している、とだれかが予言するようなことである

7
最後に、すべてのものを相互に編み合わせ、いわば<真き通ら>、これら（天体）は、宇宙全体の保全のために運行しているのだが、なお副次的な効用をも提供してくれているのである

もっとも、この説の方は、われわれにしかも各個人に、何はどのものを――つまり、われわれは自分自身から或るものを、生じたりするのを妨げるものも、生がったふうに生じるようにと仕向けるものもまったく存在しないのだから

ところで、このことは（ストア派の）説もまた、先のごすべての状態と運動を――われわれのそれも、一般にすべてのそれも――宇宙の場から出て来るのだと主張するあの説に従いなら

ともあれ、この説はすべてのものの絶対的な必然性を持ち込むのである、だからすべての原因が与えられたばあい、それぞれが生じないことは不可能である

なぜなら、すべての原因が運命（原因の連鎖）の内に組み入れられたならば、もはや生じるのを妨げるものも、ちがったふうに生じるようにと仕向けるものもまったく存在しないのだから

そして、これらの諸原因はただ一つの始原から発するのだから、われわれに残されているのは、これらが押しやる所へ動いて行くことだけである。なぜなら、あるいは先行する諸原因にしたがっており、また（行為への）発動は必然にしたがっていることになる、「われわれ次第」（自由）ということは名前だけのものにしなるだろうから

というのも、われわれが、（行為に向かって）発動するからといって、そのために少しでも（われわれに自由が）与えられるわけではない。その発動（意思決定）は、あの諸原因によって生み出されるのだから

というのは、これらにしても発動するのだから、いやそれどころか、ゼウスに誓って、火にしても、その他自己の発動に隷属し、それにたいして動くべきものの発動する（活動に向かう）のである

ところで、このことにの帰結は、すべての人がそれを信っていて、反論しないのだが、それでも彼らはストア派）は、この発動（われわれの意志決定）の原因を他に求める。この発動において、これを一つの始原とし、ここで停止することをしない

8
では、以上のものほかに、どのような原因（始原）がありうるだろうか、それはしかも、何一つ無原因のものを残さず、連続と秩序を維持し、まったくわれわれのもとの（自立的なもの）であることを許し、予言と占いを壊滅せしめないのでなければならないのだが

いやもろん魂を、（物体的なものとは）別種の始原であるものとしての魂を、存在するもののひとつとして持ち込まねばならないのだが

ストア派などが世界魂のみを始原としているのに対して、プロティノスは各人の魂をそれぞれが不生不滅で始原であると考えている

世界の魂がかりでなく、それとともに各人の魂を決して小さくない始源として、そして、あの魂のものの編み合わせなければならない、そのばあい、魂も他のものと同様に子種から生まれるのではなく、それ自身が第一次的に作用する根源であると考えねばならない

さて、魂は肉体と結びつかないでいる時には、自己自身とのみ心を傾けたことであり、自由であり、自己の本性に基いてあるものであるのだが、いったん肉体の内に入りこむと、他の事物と一緒に関係をもつようになるのだから、そして、彼らの言うように、この魂は、自己自身とのみ心を傾けたことであり、自由であり、自己の本性に基いてあるものであるのだが、いったん肉体の内に入りこむと、他の事物と一緒に関係をもつようになるのだから、

そして、魂がこう地上へやって来て連運する、あたり一面のすべての事象が、導いているのは、たいていは運（偶然）である

したがって、魂はあるときこれらの影響下に行うのだが、他のことを自分で支配しつつ、自分が望む度まに導く、そのばあい、より優れた魂はより多のことを、より劣った魂はより少ないことを支配する

なぜなら、後者は肉体の混合状態に何ほどか譲歩するので、欲望をもつとか、腹を立てるなどに陥らられるし、あるいは自己の心にしがみしなければ、富に誘惑し高ぶり、権力をもつ者利的になる

9
だから、（魂の）選択と偶然的事象との両方が混ざり合いの状態に基づいて、どんなものなのである、というのも、こうらは外に他の何かなら必然的でありえようか

しかし、前者、つまり資性の善良な魂は、その同じ魂ってあっても結果は、そのうちの一部は、何ほどか変えられることなく、むしろそれらの境遇を変えようとするので、その結果、ある状況を変化せしめるし、他の状況には自分が劣悪となることなしに譲歩するのである

しかし、すべての原因が組み合わされたならば、あらゆる出来事が絶対的に生起することとなる。また、（星々の）運行から何ほどかのものが（地上へ）寄与されるならば、これは外的な原因の一部である

10
結局、この論は、こう主張するわけである。すべての出来事は（星々によって）あらかじめ示されている、そして、すべての出来事は原因によって生じるのだが、原因には二種ある

他の出来事は周辺の諸原因によって生じる

つまり、ある出来事は魂によって、

そして魂が行うばあいに、正しい理性にしたがって行為する限りのことを、いつでも魂は自分から行うのであるが、

したがって、（魂が）分別をもたないことに対しては、他に何か原因があるな、そして、そのような行為は、運命にしたがって行うのだと言って、おそらく正しいだろう、少なくとも、運命とは外部からの原因であると考えるべきだ人びとについては

その他のことは、諸々自分自身のことを行うのを妨げられたために、それを行うというよりも、むしろ、こうなるのである

しかし、その他の人びとは、息を継ぐことができた時だけ、余裕を与えられて、美しいことを行うのである。このばあい、彼らが分別をもつ時に、どこか他の所から分別をもつことを得るのではなくて、ただ（外的諸原因で）妨害されないことによって

しかし、最上のものは、われわれ自身から出る。なぜなら、われわれが自分だけ（魂だけ）でいるばあいには、われわれはそのようなものなのである。そして少なくとも、優れた人びとは美しいことを行うのだし、そのことは、彼ら次第である